

る屋形も世にあらめ。日本國にかゝる屋形のあらばこそ。いづのかうを以て春日殿好かれ候哉。又半年も懸りてかやうの御臺所は出来せん。遠慮ましませと申されければ、局聞いて是非共にと申すに非ず。左様ならばよからんと申す事にてあり。あら見事成る御屋形やとて、頓て登城いたされたり。其の頃天下にはやり物、めつた楊弓中將某、春日局に肥前かさとして、上越す人はなかりしに、本多安房にめいりぬると皆人感じ申されり。とあり。又云ふ。本多安房政重は、秀忠將軍の乳兄弟を討ちて立退き、舅の直江山城方へ立忍び、夫より福嶋左衛門大夫の招きに應じ、安藝へ被參處、此の家も久しかるまじくと立退き、近江の堅田浦へ引籠り、暫し世間を見て居る處、關原合戦起る。此の時狸々皮の羽織着て陣中へ切つて入り、石田方を切崩す。家康公あれは何方の手の武者なるぞと被仰。父佐渡守は安房守なる事を知りあれば、ばか者也と申上げ、れば、御笑被成けると也。夫より又堅田へ引籠り居るを利長卿より召させられ、金澤へ參られけり。抑當家御代をめされし根本は、關原、大坂兩度の合戦に、勝利を得させ給ふゆゑな

り。少しもおくれを取り給はぬは、天下皆秀頼公に武心在る人多く、關東勢敗軍すべきを、本多佐渡守武勇智謀天下無双成る故也。佐渡守の謀によつて、始終勝利を得させられければ、代々將軍家其の御よしみ深く、安房迄も親の如く思召し、いつも御念比の御事也。安房加州へ參られ、大坂兩度の普請、筋違橋の普請、御上屋敷の作事、其の外上使加州へ下向の折節等安房挨拶せられ、よきにはからひける故、皆人々天下一の御家老、またともありぬべうも思はれずと、年の寄る事こそ惜しき事やと申しあへりとぞ。
○本田邸内別墅
本多氏の邸内は、臺上の一閑地にて、古木老樹生ひ茂り、遠望の風致、泉水、築山の風景殊に宜しく、兼六園に次げりといへり。鳩巢文集に載せたる元禄十五年の陂虹樓記に云ふ。臺在今朝散大夫本多君別墅。其上有青螺之峰。玉筍瑤變發地秀起。蒼翠望之。有千仞之勢。而其下有涵天之池云々。其草則芙蕖、菱荷、的歷乎洲渚之際。其樹則松檜椅桐。蒼蔚乎崖谷之中。亦無一不可入意者也。余聞、大夫君酷愛斯園。每遇暇日。燕息於此。久之不忍去。凡園中

之意越結構。皆出其目營心匠之餘。今茲夏自東都歸。又作樓架橋以便登望。而名之曰陂虹。且使余作文以記之。とあり。平次六世の祖盛昌が筆記せる享保二年の能登紀行に、鹿嶋郡瀬嵐といへる所に、人丸の祠あり。本多房州政敏浦湯治の頃、此の祠へ參詣せられ、此の宮居の前なる石塔の苦むしたるを賞翫し、所の者に乞ひて金澤の第宅へ引寄せられしが、其の後のいたく煩ひ、病症以ての外なりしかば、陰陽師等占ひけるに、神の咎めなりといへるにより、彼の石塔を神のをしみ給ふにやと、本の如く返し參らせ、新に石塔一基寄進せられけり。とあり。此の事同人の著述なる咄隨筆にも記載し、本多氏の此の石塔を取寄せられしは、正徳四年九月の事なりといへり。按ずるに、彼の室鳩巢が陂虹樓記と瀬嵐人鷹祠の石塔の事にて考ふれば、邸内の別墅を造營して庭園を築造せられしは、三世安房守政敏の時なるべし。小松能順の聯玉集に、本多政敏朝臣の亭にて、梅が枝を蒔繪しける文臺開きに、
梅が枝は花の常盤か冬の陰
按ずるに、右亭も即ち此の園地なる別亭なるべし。明治二

年舊藩主從三位慶寧卿退城し給うて、本多政以が邸宅に居給ふ頃、殊に此の園地を賞し給ひ、風雅の士族を此の別亭に召され、詩歌書畫を命ぜられ、予も召しに應じ、離亭に於て酒饌を賜はりたり。二年十二月園地の地名を侍士狩谷鷹友に撰定せしめられんが爲に、鷹友を召連れ、庭中を一覽し給うて、左の三地名を取究め、歌枕の料になし給へり。其の頃鷹友呈上せし作歌。
福草辻
ことしよりみつばよつばのとのる人
千とせかよはんさき草の辻
坂本門
君が代は今ぞさかえん坂もとの
門のとさしもさしあへぬまで
裾廻畠
とよとしのしるしも見えて打渡す
すそわの畑に雪ぞ積れる
右は輓近の事といへども記載之。
○藩侯假居所